未来を開く

青森産技センター報告

——28

春先の憂うつなくせ

少・無花粉スギを開発

苗木 18年以降に出荷

毎年春先になるとスギの木による花粉症で悩む県民も多い。現在、本県の県土面積の約2割がスギ林で、3月中旬から4月にかけて大量の花粉を飛散させている。一方、スギは成長が早く、建築材料として優れており、県内でも江戸時代から植栽されてきた。近年、スギ花粉症患者が増加しているが、スギは本県の林業振興に欠かせない。

このため、林業研究所では1999年からスギ花粉症対策品種の開発に取り組み、本県の自然環境に適した二つのスギを選抜・開発した。

一つは、花粉生産量が普通のスギの1%以下の「少花粉スギ」で、もともと県内にあった。苗木の生産に利用されている成長が早い品種の中から、国の森林総合研究所林木育種センター東北育種場（岩手県滝沢市）と共同で、花粉が少ない5品種を選抜した。

もう一つは、全く花粉を飛ばさない「無花粉スギ」である。無花粉スギは、日本で最初に富山県内で発見された花粉の無いスギと、本県産の成長が早い品種を人工的に交配させてつくった。複数の母樹の2度の交配から多様な品種をつくり、5年間の生育調査で成長が早くまっすぐに育った20品種を選抜した。

現在それぞれの品種で、苗木生産用の種子を採取するための採種園と、挿し木用穂木を生産するための採穂園を整備している。本県のような降雪・寒冷地域では通常、スギ苗は種子から生産する。一方、挿し木用穂木は雪で折れやすいが、100%遺伝子を受け継ぐというメリットがある。

少花粉スギは本年度、苗木生産事業者へ種子の販売を予定しており、早ければ2018年から苗木が一般に出回ることになる。無花粉スギは生育調査の期間を必要としたため少し遅れて、21年から種子と穂木を販売し、23年からの苗木出荷を予定している。

スギ林が花粉症対策品種のスギに置き換わるには長期間を要する。少しでも花粉を減少させて花粉症患者が増えないよう、今後も品種の研究と普及を推進していく。

（林業研究所森林環境部　田中功二）

育成している無花粉スギの挿し木苗

東奥日報　平成28年10月21日掲載

この記事は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。